

第44回学会大会開催にあたって

JSLRS 第74号、Dec. 2014

～第18回東京オリンピック大会(1964年)の“**物**”のレガシーから、“**心身**”のレガシーとなるべき2020年東京オリンピック・パラリンピック”に向けて～

日本レジャー・レクリエーション学会 (JSLRS)

会長 鈴木 秀 雄

(関東学院大学人間環境学部教授, Ph.D.)

日本学術会議登録団体である本学会(JSLRS)は、まさに第18回東京オリンピック大会が開催された昭和39(1964)年に、その前身であるレクリエーション研究懇談会として発足し、その後日本レクリエーション研究会(1965年)を経て、1971年に日本レクリエーション学会として設立された。1991年には日本レジャー・レクリエーション学会(Japan Society of Leisure and Recreation Studies : JSLRS)と改称し現在に至っている。本年(2014年)は、丁度、記念すべき学会創設50周年となり、折しも2020年の東京オリンピック・パラリンピックの招致が叶い、スポーツ基本法の制定や、また、スポーツ庁の設置なども取りざたされる今、そこで第44回学会大会〔2014年12月5日(金)～7日(日)〕は、「2020年東京オリンピック・パラリンピックが地域社会にもたらすもの」を大会テーマとして、会場校である立教大学の御協力を得て開催します。多くの学会員、関心をお持ちの皆さんの参加をお待ちしています。

さて、先の東京オリンピック大会では、国を挙げての事業がなされ、オリンピックレガシーとして“環境、都市、経済”分野のそれらが色濃く現存している。代表格である東海道新幹線は、その後全国各地域に新たな新幹線建設が広がり、現在営業中の新幹線は6路線にも及んでいる。また、東名高速道路の建設もしかりで、その後の高速道路網の発展に寄与している。翻って考えてみるに、五輪音頭やファンファーレ、日本選手団の入場時に流れたあの行進曲は今も鮮明に脳裡に焼き付いているが、しかしこれらは東京オリンピックの思い出としての類であり、当時を経験した個人それぞれが個々に記憶しているに過ぎない領域で、世代や時代を越えた文化や教育としてのレガシーになっているとは言い難い。

オリンピックレガシーとはオリンピックで生じる未来遺産であり、オリンピック・パラリンピックで新たな発展や質的向上をもたらすことが期待されている。国際オリンピック委員会(IOC)が「オリンピック・パラリンピック・レガシー」と呼ぶのは、スポーツ、都市、社会(文化、教育)、環境、経済の5つの分野であり、これらの領域でレガシーを築き、成果を上げていくことを意図している。このオリンピック・パラリンピックによるレガシーが、開催都市のみにとどまらず全国津々浦々に、さらに世界全体に、より良いレガシー(未来への遺産)をもたらすものでなければならない。逆に、“未来遺産”どころか“負の遺産”が後世に残ることのないよう、各方面からの英知を集める必要がある。オリンピック・パラリンピックの開催・運営に関わる全ての人が、多くの人々の小さな声にも真摯に耳を傾けることこそ“未来への遺産の創成”につながるものと信じてやまない。

来る2020年東京オリンピック・パラリンピックが地域社会にもたらすレガシーは、高度化された社会構造の中で、レジャー・レクリエーションが果たし得る、また担うことができる、所謂、QOL(生命の質、生活の質、人生の質)向上の先にある“個人の生きる喜び(Enjoying Personal Living; EPL)を具現化していくもの”であって欲しい。

日本が世界に誇る平均寿命の長さも、健康寿命の延伸なくしては真の幸福とは言い難い。そこで特定の運動競技(Athletic Competition)の“**振興**”に偏ることなく、楽しみとしての身体運動(Physical Activity)の日常的な“**実践**”も、“**心身のレガシー**”として社会に広く根付くよう、電力消費量の低減や薄暮時の交通事故数の減少、積極的身体活動の誘因ともなる夏時間(サマータイム)の導入などによる社会制度の好循環により、一方で「**運動習慣の社会化**」が進み、他方で「**個人による運動の習慣化**」がもたらされることも、より健康な社会の構築に向け、機能すべき2020年のオリンピック・パラリンピック・レガシーの重要な分野(スポーツ、社会(文化、教育))でもある。